MUSEO ACADEMIAE
大学博物館等協議会ニューズレター
No.25 June 2023

Contents

1 ごあいさつ
大学博物館等協議会 会長 西秋 良宏

2 大学博物館等協議会 2022 年度大会・第 17 回日本博物科学会開催報告
香川大学博物館 館長 寺林 優

4 香川大学博物館 第 25 回企画展と特別展の開催
香川大学博物館 館長 寺林 優・事務補佐員 井上幸恵

6 第三高等学校由来脊椎動物標本の目録作成
京都大学総合博物館 教授 本川雅治

7 博物館法改正の論点からみた大学博物館に係る期待
京都大学総合博物館 准教授 塩瀬隆之

8 大阪大学総合学術博物館創立 20 周年記念展「MOU 収蔵品展－創立からもう 20 年－」の開催
大阪大学総合学術博物館 講師 伊藤 謙

9 楢葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」の開館
東京大学総合研究博物館
准教授 佐々木猛智・教授 三河内 岳
特任教授 洪 恒夫・特任教授 松本文夫・特任助教 白石 愛

ごあいさつ

大学博物館等協議会 会長 西秋良宏

2023 年度から大学博物館等協議会、日本博物科学会の会長をつとめることになりました東京大学総合研究博物館館長の西秋です。この協議会は、私どもの大学の施設が国立大学の本格的教育研究型大学博物館の第一号として 1996 年 5 月開館し、その後、複数の大学博物館が開館する中、京都大学総合博物館のイニシアチヴのもと、お互いの連携連絡、意見交換のために始まりました。その後、2006 年に北海道大学総合博物館が中心となって立ち上げた日本博物科学会という学会組織の運営をも開始し、単なる大学博物館間の情報交換の場だけでなく、大学博物館活動のありかたにつき研究発表する団体として現在にいたっていると承知しています。

協議会設立以降、約四半世紀をへて、今日、大学博物館をとりまく状況は大いに変わってきました。例えば、大学博物館の役割の一つは大学と社会とのインターフェイスを作ることですが、その関係のあり方も変容してきました。特に国立大学の法人化以降、変容は続いています。また、昨年度の博物館法の改正も記憶に新しいところです。従来の博物館と大学博物館がどういった立ち位置の違いを持つのか。これは、大学博物館とは何かという本質的議論にかかわる問題提起でしたので、本協議会のシンポジウムのテーマともなりました。

では、大学博物館はこうあるべき、という一律に同じ大学博物館像をつくることが本会の役割かと言えば、そうではないと考えます。この間の歩みをみても、本会への加盟館が増えるにつれ、その個々が実に個性的、多様なふるまいをしていることがあきらかになっています。それは、学術の自由を謳う大学において当然のことで歓迎すべきことでありましょう。

大学の博物館は個々が独自のありかたを摸索し続けてよいはずです。本協議会では、そのための連携連絡、意見交換の場を提供することを主眼として運営をすすめていきます。2020 年度以降、新型コロナ禍の中、それ自体も難しい時期が続きました。制限が多い中、難しい舵取りを担当された前任校の香川大学博物館、館長各位には改めて感謝申し上げる次第です。

本年度以降は、新型コロナ禍以前の対面型集会の開催ができることを念じています。オンライン集会と対面型集会がどのように違うのかは、この間、みなが実感したとおりです。多くの関係者が各地の大学博物館を訪れ、それぞれの試みを見学し、意見交換し、自らの博物館あるいは将来の大学博物館像について忌憚なく議論する機会を設けるよう努めていきます。 それをもって大学博物館の未来を創造する会として、関係各位の積極的なご発言、関与をお願いする次第です。

大学博物館等協議会2022年度大会・第17回日本博物科学会開催報告

香川大学博物館　館長　寺林 優

第25回となる大学博物館等協議会2022年度大会および第17回日本博物科学会が、2022年6月16日（木）・17日（金）にオンラインで開催された。2年連続のオンライン開催に至った経緯、準備ならびに開催記録、特別講演のテーマとした博物館法の一部改正に係る大学博物館等協議会（以下、協議会）の対応と加盟館の状況を報告する。

現地開催中止と２年連続のオンライン開催決定

2020年2月に新型コロナウイルス感染症が拡大し、同年3月には国内にも影響が出始めた。2020年6月に九州大学総合研究博物館での開催が予定されていた大学博物館等協議会2020年度大会・第15回日本博物科学会は中止となり、2021年6月24日（木）・25日（金）に琉球大学博物館（風樹館）で開催が予定されていた大学博物館等協議会2021年度大会・第16回日本博物科学会はオンライン開催となった（寺林優，大学博物館等協議会2021年度大会・第16回日本博物科学会開催報告．大学博物館等協議会ニューズレター，No.24，pp.1-2，2022）。

大学博物館等協議会2022年度大会・第17回日本博物科学会の開催方法を協議するために、協議会拡大三役会議が2022年3月8日（火）にオンラインで開催された。出席者は、2022年度三役の寺林優会長（香川大学博物館長）、西秋良宏副会長（東京大学総合研究博物館館長）、小澤丈夫監査（北海道大学総合博物館館長）、会場校である琉球大学博物館（風樹館）の辻和希館長と各館の事務担当者他が陪席した。開催方法として、(1) 会場校開催、(2) ハイブリッド（会場校＋オンライン）で開催、(3) オンラインのみで開催が候補として挙がっていた。琉球大学博物館の辻館長より、新型コロナウイルス感染症の状況が予測できないため2022年度大会の琉球大学での開催を中止したいとの要望が出され、了承された。オンライン開催は、会長校である香川大学博物館を中心に、副会長校の東京大学総合研究博物館の西秋館長、監査校の北海道大学総合博物館の小澤館長を加えて実行委員会を組織することが申し合わされた。2023年度大会は、北海道大学総合博物館での開催が決定していたので、琉球大学博物館での開催は、2024年度に延期することを2022年度大会で協議することになった。この時点では、2023年度大会は、ハイブリッドでの開催を目指すという提案が北海道大学総合博物館の小澤館長よりあった。

開催準備

香川大学博物館は、会長校ならびに協議会事務局として、協議会加盟館の連絡先名簿の更新、館長会議および総会の議事、博物科学会の会員名簿の更新、理事会および総会の議事等の準備に加え、特別講演もしくはシンポジウムの企画立案、博物科学会のプログラム作成、大会運営に至るまで、実行委員会の中心として、2年連続でほとんど全てを担うことになった。

ビデオ会議システムとしては、2021年度大会と同様にZoomミーティングを使用することとした。香川大学の博物館および情報図書課のメンバーは、情報図書課長の交代があった他は大きく変わっておらず、前年度の経験を活かせた。ポスター発表と各館の紹介は実施せず、これまでの大会と同様に、参加登録（講演参加、聴講参加）している者だけが参加できる形とした。

特別講演のテーマは、「博物館法の一部改正について」とし、文化庁企画調整課政策審議係長の上田和輝氏、文化審議会博物館部会法制度の在り方に関するワーキンググループ委員の塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館准教授）に依頼した。博物館法が1951（昭和26）年に制定されてから約70年で一部改正され、2022（令和4）年4月15日に交付され、2023（令和5）年4月1日に施行されることを受けて企画し、今後の大学博物館の在り方について、有益な助言と指針が得られることを期待した。

開催当日

2022年6月16日（木）12時30分から、協議会館長会議および博物科学会理事会の受付を開始（Zoomミーティング①入室開始）し、13時から順に開催された。質問はZoomのリアクション「挙手」機能、採決はZoomの投票機能を用いた。館長会議は、構成員の総数41に対し、出席22、委任状による代理出席6、委任状（会長に一任）12、欠席1で、過半数以上の定足数を満たしていた。理事会の定足数は、構成員の3分の2以上であるが、構成員の総数41に対し、出席22、委任状による代理出席6、委任状（会長に一任）12、欠席1と館長会議と同数で、定足数を満たしていた。館長会議および理事会とも、全ての審議事項は原案通り了承された。

13時30分から、協議会の受付を開始（Zoomミーティング②入室開始）し、14時から協議会を開催した。オンライン大会の参加方法説明、実行委員会委員長の挨拶に引き続き、特別講演に移った。最初の特別講演は、文化庁企画調整課政策審議係長の上田和輝氏による「博物館法の一部改正について」、引き続き塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館准教授）による「博物館法改正の論点からみた大学博物館に係る期待」であった。予定時間の20分と15分では不十分であったようで、約5分ずつ時間を超過した。

協議会年度大会での行政説明は、2011年度大会での特別講演以来であった（2012年度と2013年度大会は、行政官が来賓として参加）。協議会年度大会のプログラム編成は、会場校に一任されており事情は様々であったろうが、2022年度大会では、博物館法の一部改正を受けて、協議会として情報を共有することを目的とした。

博物館法の主な改正内容として、法律の目的および博物館の事業の見直しにおいて、デジタル・アーカイ

ブ化の追加、他の博物館との連携や地域の多様な主体との連携・協力による文化観光など地域の活力向上への寄与の努力義務化、博物館登録制度の見直しなどが説明された。協議会加盟館の設置主体は、ほとんどが国立大学法人であることから、博物館登録制度が見直されても、登録博物館として登録することは不可能で、指定施設（これまでの博物館相当施設）にしかなり得ない。一方で、博物館関連支援予算を獲得するためには、登録博物館もしくは指定施設である必要があり、登録制度と連動した博物館振興策において、大学博物館がどのように扱われるのか、必ずしも明確にはならなかった。

特別講演会終了後、協議会総会、引き続き博物科学会総会を開催した。両総会終了後の16時20分から日本博物科学会研究発表に移り、「展示」2件、「その他」1件の口頭発表が行われた。2日目の博物科学会は、2022年6月17日（金）8時30分から受付を開始（Zoomミーティング③入室開始）した。「展示」4件、「地域と社会連携」3件の口頭発表が行われた。口頭発表は、1日目と2日目を合わせて10件とオンライン開催した前年度の12件を下回った。事前の参加申し込みは112名であったが、Zoomミーティングの入退室記録から、1日目の参加者数は108名、2日目の参加者数は79名であった。

博物館法の一部改正における大学博物館

協議会三役は、博物館法の一部改正について、2021年9月10日と2022年1月20日に文化庁から説明を受けた。協議会加盟館に対しては、博物館部会における博物館法制度の在り方の見直しについてのアンケートを2021年10月に実施した。下記がアンケート項目である。

1. 機関名
2. 登録種別（登録博物館、博物館相当施設、博物館類似施設、その他）
3. 現在所属の学芸員の人数
4. 資料の登録博物館のメリット以外で、どのようなメリットがあれば、登録博物館として申請するか（自由記載）
5. 博物館部会における博物館法制度の在り方の見直しについてのご意見（自由記載）

アンケート回答より、協議会加盟41機関中、博物館相当施設は20機関であった。26機関において1名以上の学芸員が所属していた（相当施設20機関中では19機関）。しかし、学芸員として雇用されているか、資格保持者が所属しているだけかは不明である。大学博物館は、一般の博物館と位置づけも目的も異なり、博物館法の改正によって、運営や活動に制約が生じないことを望む意見が多数あった。博物館法の一部改正後も指定施設の要件については検討中の事項もあり、明確となっていないことも理由であると考えられる。今後も、協議会を通して最新の情報を得ることと、加盟館相互の意見交換を行うことが必要であると考えられる。

図1．オンライン会議集合写真（写真の一部を改変）

香川大学博物館　第25回企画展と特別展の開催

香川大学博物館　館長　寺林 優・事務補佐員　井上幸恵

香川大学博物館では、2022（令和4）年度に、第25回企画展「発酵のめぐみ」と特別展「KUNIBO HISTORY―マルチクリエーター・和田邦坊の原点―」を学内外の研究者および学外の研究機関等との協働・協力によって開催した。両展の関連行事とあわせて報告する。

第25回企画展「発酵のめぐみ」

2022年7月19日（火）から11月19日（土）、前期：7月19日（火）から9月10日（土）、後期：9月16日（金）から11月19日（土）の会期で開催し、82日間で1,186名の来館があった。

発酵というと酒・醤油・味噌・納豆などの発酵食品が思い浮かぶであろう。香川県の醤油生産量は全国3位とトップクラスである（香川県HP）。小豆島には明治初期に400軒もの醤油蔵があり（現在は22軒ほど）、香川県産業技術センター発酵食品研究所の元となった小豆島醤油製造同業者組合立醸造試験場が明治38年に設立されている。

発酵や微生物のはたらきは、発酵食品に限らず多岐にわたる。樹液に昆虫が集まるメカニズムやウサギの消化管のしくみなどにも関わり、たばこの加工過程、昔ながらの土壁の製造、微生物によるコンクリートの修復など建築分野にも関係している。同展では、香川大学の農学部、教育学部、創造工学部の研究から、多岐にわたる展示品と解説パネルを紹介した（図1）。香川県は讃岐うどんで有名だが、廃棄うどんから微生物の働きによって紙を作る研究（SDGsのゴール12と9に該当）と、伝統工芸士によって製作された丸亀うちわなども展示した。香川県内の研究機関から、国立研究開発法人産業技術総合研究所四国センターでの微生物発酵茶の研究、香川県産業技術センターで開発した発酵食品を紹介した。さらに、瀬戸内海の塩飽諸島に残る茶粥文化について、さぬき瀬戸の茶がいさん普及会がパネル展示した。

ハンズオン展示「酵母を観察してみよう」、「酵母の匂いを嗅いでみよう（パン酵母、清酒酵母、実験室酵母）」、「麹菌を観察してみよう」を新型コロナウイルス感染症対策として消毒を徹底したうえで実施した。

香川県内には、日本初の縦型乾式メタン発酵施設によって様々な廃棄物を原料としてバイオガスを生産し、温室効果ガスの削減につなげている企業がある。第87回ミュージアム・レクチャー「日本初の縦型乾式メタン発酵施設を見学しよう」を8月20日（土）午前と午後の部に実施し、78名が参加した（図2）。香川大学の卒業生を含む若手社員と香川大学農学部の学生らが協働して、レクチャーの準備と運営にあたった。参加者からは、廃棄物が微生物のはたらきによって再生可能エネルギーに変わるしくみとバイオガス事業の意義が良く理解できたなどの声があった。

第88回ミュージアム・レクチャー「ブラタモリ的幸町キャンパスから歩く醤油蔵の旅」を10月22日（土）午前と午後の部に実施し、37名が参加した。講師は、NHKブラタモリ「高松～巨大な海城は町をどう発展させた？～」の案内人を務めた香川大学経済学部教授の西成典久氏であった。醤油蔵の見学は、小豆島や県内他所でも可能であるが、参加者の利便性を考慮し、意外性のある街歩きで地域の魅力を紹介することを目指し、当館を徒歩で出発して、土地の成り立ちと土地利用を学びつつ、醤油蔵の見学を含むコースで実施された。周到な準備がなされ、時間配分も的確であり、参加者の満足度も高かった。

特別展「KUNIBO HISTORY―マルチクリエーター・和田邦坊の原点―」

2023年1月19日（木）から3月18日（土）の会期で、灸まん美術館／和田邦坊画業館と共催し、41日間で1,219名の来館があった。和田邦坊の作品を多数所蔵する灸まん美術館／和田邦坊画業館にとって、初めての館外展示であった。

和田邦坊（1899-1992）は、香川県琴平町で生まれ、時事漫画家、小説家、農業学校の教員、讃岐民芸館の初代館長、デザイナー、商業プロデューサー、画家など多彩な活躍をした人物である。代表作には《成金栄華時代》「現代漫画大観 第三編 明治大正史」（中央美術社、昭和3年）や「ウチの女房にゃ髭がある」（新陽社、昭和11年）などがある。香川の銘菓をはじめとする物産品の数々のデザインを手がけ、和田邦坊の名前を知らなくとも見たことがある人は多いと思われる。

同展では和田邦坊の多彩な活躍を作品と共に紹介した。当館のエントランスには、和田邦坊が昭和30年代にデザインした香川県の観光ポスターを拡大したタペストリーを吊るし、フォトスポットとなった（図3）。時事漫画家、小説家と活躍した頃の書籍、パッケージデザインの仕事などを展示した（図4）。晩年まで画家として描き続けた絵画作品や画材道具、創作活動をサポートしたコレクションとして、旧宅で所蔵されていた文房具や玩具などの小物類も同展で初めて公開された。

香川大学創造工学部の二つの研究室が共同で2020年に開始した「邦坊×AIプロジェクト」の成果も公開した。同プロジェクトは、灸まん美術館／和田邦坊画業館が所蔵する和田邦坊の作品をAIの応用研究を専門にする喜田弘司研究室がデータ化して色使いや運筆などの特徴を解析し、デザインを専門とする大塲晴夫研究室が描かれた対象や画法を感性にもとづいて作品を分類し、それらの研究をまとめたコンセプトブックを作成した。灸まん美術館との共同企画として、和田邦坊作品をモチーフに「酒かす」、「赤みそ」、「よもぎ」3種類のオリジナルクッキーのパッケージデザインを制作し、香川大学生協ショップで同展の会期中に販売された。香川大学生協カフェでは、「酒かす」クッキーを使用したコラボスイーツが販売された。

関連イベントとして、香川大学経済学部学生チャレ

ンジプロジェクト「TERASU」による提灯展示と讃岐提灯手作りワークショップを1月20日（金）に16時の閉館時刻を18時まで延長して実施した。展示解説は、1月21日（土）に実施した灸まん美術館の西谷美紀学芸員による学芸員トーク（図5）の他、公益財団法人高松観光コンベンション・ビューローが養成した和田邦坊ナビゲーターによるナビゲータートークを4日間（計6回）実施し、学内外から多数の参加があった。同展と灸まん美術館企画展のスタンプラリーでは、両展を巡った方にオリジナル邦坊グッズをプレゼントするなど、両館の周遊を促す試みも実施した。

アンケートへの回答率は、これまでの展示よりも高く、感想の自由記述から、和田邦坊の作品の魅力、意外かつ多彩な活躍を十分に伝えることができ、和田邦坊の認知度が向上し、香川大学の研究成果の情報発信にも繋がったことが読み取れた。同展および関連行事を通して、香川県が産んだマルチクリエーターの魅力を発信することができ、文化観光の推進にもつながると考えられる。

図1．第25回企画展の展示風景

図3．特別展の香川大学博物館エントランス

図2．第87回ミュージアム・レクチャー

図4．特別展の展示風景

図5．特別展の展示解説（灸まん美術館西谷学芸員）

第三高等学校由来脊椎動物標本の目録作成

京都大学総合博物館　教授　本川雅治

京都大学総合博物館では教養部・第三高等学校由来の動物標本目録の第一部となる脊椎動物標本目録を2023年3月に出版した（図1，本川ほか 2023）。

図1．第三高等学校由来脊椎動物標本目録

1894（明治27）年に京都に設立された第三高等学校は、1897（明治30）年の京都帝国大学設立以降は大学予科としての役割を担った。第三高等学校が1950（昭和25）年に解散した後、標本や資料は1954（昭和29）年設立の京都大学教養部、教養部が廃止された1992（平成4）年からは新設された総合人間学部に継承、2001（平成13）年に完成した京都大学総合博物館の自然史収蔵庫に移管されて現在に至っている。今回は第三高等学校・教養部由来の脊椎動物標本1089点を目録化した。このうち第三高等学校由来が596点で、そのほとんどが明治・大正期に購入・採集されたものである（図2）。

図2．第三高等学校の標本群（2017年企画展「標本からみる京都大学動物学のはじまり」から）

標本は産地、採集者、採集年月日などの基本情報が重要である。第三高等学校の標本の多くは業者から購入したもので、基本情報が不十分なものが多く、その標本の価値を減少させる要因といわれることもある。一般に博物館では、1．基本的な情報が付加された標本、2．基本情報が失われてもなお希少性の高い標本（第三高等学校標本ではカモノハシやハリモグラなど）が選別され、3．基本的な情報が失われた普通の標本（第三高等学校標本ではタヌキ、キツネ、イタチ、イヌ、ネコ、ウサギなど）は価値が少なく、研究活用はあまり期待できない（本川 2019）。一方で、今回は「第三高等学校」というまとまりを重視し、全ての標本に対して残された情報の収集に努めた。

第三高等学校の標本の多くは1899（明治32）年に動物学の教授に就任した宍戸一郎が動物学教育のために収集・購入したものであることが、今回の目録作成であらためて確認された。多様な動物の形態と機能を、系統分類学や比較・機能形態学で学ぶための教材だったといえる。標本群全体を見ると、多様な分類群を網羅するように集められたことがわかる。希少性の高いカモノハシやハリモグラも、普通の標本であるイヌ、ネコ、ウシ、ウサギなどと並べられ、単孔類、食肉類、偶蹄類、兎類といった高次分類群が示す形態的な違いを学ぶために活用されたのであろう。それぞれの標本の価値に加えて、カモノハシ、ハリモグラ、イヌ、ネコ、ウシ、ウサギなどの多様性が標本群の価値を生みだしている。今回の目録作成では、第三高等学校の標本群の構成を時系列に見ながら、文献情報などもあわせることにより第三高等学校の標本形成史を探った（本川 2023）。

標本群の構築主体や時代（今回は、第三高等学校、明治・大正期）に着目すると、標本群を構成する標本内容（例えば分類群の構成）や時間軸における標本のつながりや配列が見えてきた。第三高等学校の初期の標本には、東京帝国大学由来と推測される標本が含まれることが明らかになった。第三高等学校の歴史を考える上で、人のつながりである「人脈」に加えて、異なる機関間の標本のつながりとしての「標本脈」に着目することにより、さらなる興味深い発見につながるのではないだろうか。個々の標本の情報を積み重ねるだけではなく、そのつながりや配列をみることができる点において、目録にはデータベースにはない意義があると考えている。第三高等学校の歴史解明において、個々の標本だけでなく、標本群からさらに新しい発見に繋がることが期待される。

動物標本ではこれまで分類学や比較形態学の研究者を主要な利用者と想定してきた。そこでは、個々の標本の情報を知ることが最も重要である。第三高等学校の標本群を例に考えると、情報の失われた標本は除外し、その作業のための時間や労力を情報が伴った他の標本群のデータ構築に費やすのが適当な戦略といえるかもしれない。一方で、今回の目録作成では、それとは異なる戦略として標本群全体に注目することで、学校史解明といった分類学や比較形態学とは異なる新しい標本研究の可能性を探った。今回の第三高等学校の標本群の目録化が示した成果をもとに、今後は明治期・大正期の他の機関が所蔵する標本群との比較研究や標本脈の解明への展開が期待される。本目録は京都大学学術情報リポジトリ KURENAI で公開している（http://hdl.handle.net/2433/282750）。

本川雅治．2019．埋もれた標本に光をあてる．博物館研究 54: 4-5.

本川雅治．2023．第三高等学校動物学コレクションの形成史．（本川雅治・松沼瑞樹・岡部晋也・伊藤毅・西川完途：京都大学総合博物館収蔵資料目録　第10号　教養部・第三高等学校由来動物標本　第一部　脊椎動物標本）pp.

17-24.
本川雅治・松沼瑞樹・岡部晋也・伊藤毅・西川完途．2023. 京都大学総合博物館収蔵資料目録　第10号　教養部・第三高等学校由来動物標本　第一部　脊椎動物標本．京都大学総合博物館，123 pp. 京都．

博物館法改正の論点からみた大学博物館に係る期待

京都大学総合博物館　准教授　塩瀬隆之

第208回国会において「博物館法の一部を改正する法律」が成立し、2023年4月1日より新たな制度に移行した。約70年ぶりとなる博物館法の単独改正ということも注目を集めたが、登録制度の見直しやデジタル・アーカイブ化に関する文言追加など重要な改正点が多く含まれた。その中でも特に注目を集めたのが、「文化芸術基本法の精神にも基づく」と新たに追記されたことである。この新たな目的の追加により、単に観光消費されるなど貴重資料の保存戦略と矛盾する可能性を指摘する声も聞かれるが、文化芸術基本法の条文を丁寧に読めば、あくまでも「文化芸術の継承、発展及び創造」に資する役割を担うという大前提が明記されており、これをないがしろにすることなく正しく運用しさえすれば、持続可能な貴重資料の保存戦略の一助となるはずである。

登録審査基準の見直しや設置主体の限定撤廃など、博物館業界全体に関わる大きな変更点も多いが、大学博物館の場合はその設置主体に国立･公立･私立といった異なる法人立が混在することでより複雑に関わる。まず国立大学の博物館は、国立科学博物館などと同様に今回の改正についても登録対象外となる。これはすでに国立大学法人立や独立行政法人立など、個別法においてその事業内容が明確に規定されているため、別の法的枠組みが重複することは適当でないと判断されたからである。公立や私立の大学などが有する博物館のなかで、すでに登録博物館の制度を活用している大学博物館や、これから登録を検討する大学博物館においては、それぞれのメリットと登録にかかる手続き負担を天秤にかけて判断されるものと考えられる。

改正案に関する検討過程においても、大学博物館がおかれる運営形態の特殊性、とくに施設や人事、会計上の独立性困難の観点について状況は共有されている。教室棟など従来の教育研究施設の一部を間借していたり、スタッフも関連する所属学部の教職員が兼任している場合があったりするなど、一様な外形的基準での審査は大学博物館には馴染まない。運営経費も当然ながら関連の深い学部に紐づくなど会計上の独立性も示すことは難しい。これら手続き上の課題について議論される際の質疑応答のなかでも、たとえば登録を断念した大学博物館が「博物館」という呼称が使用不可になるなどと心配する声も聞かれたが、法改正において「名称付与の独占は行わない」と断言されており、それは杞憂である。

登録については大学博物館ごとの判断によるが、法改正はそもそも歴史・文化・自然科学をはじめ様々な分野の貴重資料を持続可能なかたちで次世代へ受け継ぐ体制を盤石にするためでなければ意味がない。登録基準や手続きの設定如何によって、一つ一つの小さな博物館がその活動を断念し、博物館の数を減らしてしまうような本末転倒な結果にならないように、これまで以上に博物館同士が力をあわせて国民の資産を守り続けなければならない。たとえば震災復興時に活躍した文化財レスキューのように、一つの館に留まらない連帯によって我が国全体としての博物館機能の強化が期待される。

もう一つ、大学博物館として注目したい改正点の一つがデジタル・アーカイブ化への対応である。コロナ禍以前より、わたしたちの文化、経済、社会活動の多くがインターネットをはじめとする電子空間上へ移行が進み、コロナ禍でその傾向は加速した。情報技術の進化により、あらゆる情報がインターネットを通じて収集し、発信される時代、大学博物館としても資料のデジタル・アーカイブ化を充実させることで、遠隔地にいても、博物館の開館時間でなくても、研究者以外にも望む国民が博物館資料へアクセスできるという利便性の向上が期待される。

しかし同時に物理的な展示空間にも大きな転換点が訪れている。デジタルデータの多くは画像出力端末での提示くらいしか現状は選択肢がなく、結果としてタブレットやモニターだけがずらりと並ぶ単調な展示空間に陥らないような創造的な展示デザインが期待される。しかし、大学における教育研究活動の資料も成果も、はじめからパソコンや電子空間上にのみ存在するボーンデジタルの資料も増えてきており、すべてが電子空間上ではじまり電子空間上で終わるような博物館も出てくるかもしれない。このデジタル・アーカイブ化そのものが、博物館としては諸刃の剣にならないよう持続的な検討と慎重な対応が求められる。最後に、2022年夏ICOMプラハ大会で採択された博物館の新たな定義の最後の一文に注目すると、「倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する」とある。ここで＜博物館＞≒＜大学＞と読み替えても成立しそうな定義であり、むしろ大学博物館こそが得意なコミュニケーションで相応の役割を果たせるのではないかと期待する。

大阪大学総合学術博物館創立20周年記念展「MOU収蔵品展－創立からもう20年－」の開催

大阪大学総合学術博物館　講師　伊藤 謙

大阪大学総合学術博物館は、2022年10月24日から12月17日の約2か月間にわたり、創立20周年を記念した「MOU収蔵品展－創立からもう20年－」と題する特別展を開催し、私伊藤が主担当を務めさせていただきました。

この展覧会は、大学関係者や博物館関係者をはじめとする広い層の来場者に対し、博物館が果たしてきた役割や今後の方向性について理解を深める機会を提供することを目的としておりました。

「地域に生き、世界に伸びる」をモットーとする大阪大学に所属する大阪大学総合学術博物館（The Museum of Osaka University：略称MOU）は、2002年に創立されました。大阪帝国大学（1931年創立）から続く教育研究の成果や、本学の精神的源流である懐徳堂・適塾などの大坂町人の学問所の姿勢を継承することを使命の1つとし、地域社会とも密接に連携して活動してきました。

今回の記念展では、博物館創立からの20年間で蓄積された数多くの学術資料の中から、未公開の寄贈・寄託資料を中心に選りすぐりの展示品が公開されました。展示は、アート作品、収蔵品の教育への活用、教員の研究資料、卒業生の資料の4つのカテゴリーに分けて展開され、MOUの多様な活動や役割について幅広く紹介いたしました。

この20周年記念展を通じて、MOUが担ってきた学術資料の収集・保存・展示や地域社会との連携などの多岐にわたる活動を振り返ることができるとともに、今後の展望や新たな取り組みについても考察する機会となったと思います。

今回の展覧会では、豊中市所蔵の日本絵画や大阪大学吟詩部の資料など、多くの初公開資料を紹介することができました。豊中市所蔵の作品群は、研究･教育･展示のためにMOUに寄託されているもので地元自治体との連携の成果を示すものであり、大阪大学吟詩部の資料は学生史の保存としての重要性を示すものです。これらの展示を通じて、MOUが地域との繋がりを大切にしながら、学生たちの活動や歴史を後世に伝える役割を果たしていることを来館者にご理解いただくことを期待しました。

また、展覧会では、MOU教員の科学研究費助成事業（科研費）の研究プロジェクトの一環として整理・研究されたMOU所蔵の鉱物群も公開されました。これにより、大学博物館が学術研究のアウトリーチ活動を積極的に行っていることがより具体的に来館者に理解されたことでしょう。

さらに、MOUの教育活動についても紹介いたしました。MOUでは、2010年度から学内実習を担当し、収蔵品や複製品を用いた「模擬展覧会」の企画・開催を行ってきました。学生たちは、展覧会のコンセプトづくりから展示空間のデザイン、ポスターやチラシの作成、資料や解説パネルの展示まで、実際の展覧会開催と同様の手順で企画・運営に携わります。

本展では、これまで模擬展覧会で使用された収蔵品や学生によって作成されたポスターなどが展示され、MOUの教育活動が紹介されました。これにより、博物館が大学教育の一部として果たしてきた役割や、学生たちの成長を支援していることが伝わったことと思います。実際に模擬展示での経験を通じて、学芸員としての道を歩むことを決意した学生がいるのはもちろんのこと、将来の研究テーマを見つけるきっかけとなる学生も現れており、彼らの著作物についても本展覧会では紹介をいたしました。

新型コロナウィルス対策が求められる厳しい状況下においても、展覧会と関連イベントは無事に開催され、多くの来場者に楽しんでいただくことができました。これには、関係者各位の協力が不可欠でした。この20周年を記念する展覧会を通じて、博物館関係者は将来に向けた共同作業の基盤を築いたと言えるでしょう。ここに、来場者や関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

主催：大阪大学総合学術博物館・豊中市　　共催：豊中市市民ホール等指定管理者

チラシ

展示室の様子（第１章）

展示室の様子（第３章）

展示室の様子（第２章）

展示室の様子（第４章）

楢葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」の開館

東京大学総合研究博物館　准教授　佐々木猛智
・教授　三河内　岳　・特任教授　洪　恒夫
・特任教授　松本文夫　・特任助教　白石　愛

2023 年 4 月 22 日に福島県楢葉町に連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」がオープンした（図 1-7）。この博物館は楢葉町と東京大学総合研究博物館の連携により、地球の歴史から町の歴史、未来についての壮大な時間軸の展示を実現したものであり、極めてユニークな内容の展示施設である。

楢葉町は 2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震により深刻な被害を被った場所である。原発事故により全町民が避難を余儀なくされ、住民の復帰と町の復興が始まったのは 2015 年 9 月であった。この復興の過程で楢葉町と東京大学の連携が始まり、2018 年からは東京大学アイソトープ総合センターにより大学等の「復興知」を活用する福島イノベーション・コースト構想促進事業が始まった。さらに 2019 年度からは東京大学総合研究博物館もその連携に加わり、今回新しい博物館施設が実現した。

連携ミュージアムは、楢葉町と東京大学総合研究博物館の両者にとって大きなメリットのある施設である。楢葉町では楢葉町歴史資料館が地震の被害を受けて以来再開の見込みが立っていなかった。一方、東京大学総合研究博物館は東京の本館の収蔵資料が溢れ、深刻な狭隘化の問題を抱えていた。そこで、東京大学総合研究博物館は楢葉町歴史資料館の展示更新を支援し、一方、楢葉町歴史資料館分館を東京大学総合研究博物館の収蔵庫として利用させていただくことにより、双方の問題の解決を図ることができた。

新しく改装した展示室は、従来の展示とは全く異なる内容に変貌した。展示室は主に以下の７つのコーナーからなる。

(1) プレートテクトニクスと福島（図 2）：地震は地球の表面を覆うプレートが動いて引き起こされる現象である。福島県の阿武隈山地は日本のプレートテクトニクス研究の発祥の地になった場所であり、東京大学に残されていた過去の研究試料を展示した。プレートの動きは地下資源を地上に押し上げ我々に利用可能にする効果もあり、常磐地域で石炭が採掘できたのもプレートテクトニクスと関係することを説明している。

(2) 鉱物と化石のトンネル展示（図 3）：東京大学の標本を用いて鉱物と化石の多様性を示す展示である。トンネル状の空間にデザインすることで視覚的に強い印象を与えている。

(3) タイムライン展示（図 4）：地球 46 億年の歴史が始まって以来現在に至る歴史を説明している。隕石と鉱物の標本を用いて地球の歴史を説明し、その後の生命の誕生と、カンブリア紀以降の爆発的な生命の進化、５回の大量絶滅を生き延びた生命の歴史を化石標本とともに説明し、最後に現在楢葉町に生息している生物を展示している。

(4) 楢葉町の歴史展示（図 5）：楢葉町の遺跡の発掘品や古文書、古写真を用いて町の歴史を時系列で説明している。天神原遺跡の出土品は国の重要文化財に指定されている。

(5) プロジェクションマッピングによる楢葉町の史跡の紹介（図 6）：ジオラマとプロジェクションマッ

ピングを用いて町内の史跡を紹介し、震災後の再生を目指す映像を流している。
(6) 未来展示ゾーン（図 7）：地元の人々のインタビュー映像を流し、それを観た来館者が町の未来について自由に感想を書き残すことができるコーナーである。
(7) 特別展示室：定期的に更新可能な特別展示室を一室設けている。現在は小惑星リュウグウについての展示を行っている。

今後は、バックヤード展示として、収蔵庫の様子を見学できる収蔵展示室と研究者や大学院生が研究を行う様子を見学できる研究現場展示の２室を追加整備する予定である。

展示室のある建物に隣接する収蔵庫（図 8, 9）は二階建で、多数のスチール棚が設置され、１階には鉱物・岩石標本、２階は古生物標本が収蔵されている。これらはかつて東京の博物館内で廊下等に溢れて積み上げられていたものであり、建物の耐荷重に対して重量が過大であることも指摘されていたが、移設によりその問題を解決することができた。標本の運用は、重要度の最も高いものと使用頻度の高いものを東京に置き、現時点では使用頻度が低いが歴史的に重要で長期保存が必要なものを楢葉町に収蔵している。しかし、移設後に必要になる標本もあり、福島と東京間での小規模な標本の移動があり、移設した標本の活用も続いている。

楢葉町では４年間の準備期間を経て新しい展示室を開館できたが、今後はこの場所を活用した博物館活動の新しい展開が目標である。定期的に講演会等を開催し、特別展も更新するなど、利用が継続し一層活性化させ、それを長期継続する必要がある。東京大学総合研究博物館ではこれまでも複数拠点の活用による多館体制を進めてきたが、連携ミュージアムの開館により博物館機能のネットワーク化が強化された。また、標本収蔵に関しても「分散収蔵」の好例として一層の発展が期待される。

図１～７. 展示室．1. 展示室の入口．2. プレートテクトニクスと福島．3. 鉱物と化石のトンネル展示．4. タイムライン展示．5. 楢葉町の歴史展示．国指定重要文化財が展示されている．6. プロジェクションマッピングによる楢葉町の史跡の紹介．7. 未来展示ゾーン．８～９. 収蔵庫 8. 収蔵庫の外観．9. 収蔵標本の例．

大学博物館等協議会加盟館の活動状況

東京藝術大学大学美術館

「買上展」藝大コレクション展 2023
第一部　巨匠たちの学生制作
第二部　各科が選ぶ買上作品
2023 年 3 月 31 日（金）～ 5 月 7 日（日）
本館　展示室 1 ～ 4

台東区コレクション展
―文化・芸術の杜　上野を巣立った芸術家たち―
2023 年 6 月 17 日（土）～ 7 月 9 日（日）
本館　展示室 3、4

林武史退任記念展　―石の勝手―
2023 年 9 月 30 日（土）～ 10 月 15 日（日）
本館　展示室 3、4　陳列館 1 階

美しさの新機軸
～日本画・彫刻　過去から未来へ～
2023 年 11 月 3 日（金・祝）～ 11 月 12 日（日）
本館　展示室 1、2

共創の場〈仮〉
2023 年 11 月 18 日（土）～ 11 月 26 日（日）〈仮〉
本館　展示室 3、4

東京藝術大学大学院美術研究科
博士審査展
2023 年 12 月 10 日（日）～ 12 月 25 日（月）頃
本館　展示室 1 ～ 4、陳列館

東京藝術大学卒業・修了作品展
2024 年 1 月 28 日（日）～ 2 月 2 日（金）
本館　展示室 1 ～ 4、陳列館、正木記念館

大吉原展〈仮〉
2024 年 3 月 26 日（火）～ 5 月 19 日（日）
本館　展示室 1 ～ 4

Glitches in Love：A New Formula／
愛のグリッチ：新しい公式
2023 年 3 月 24 日（金）～ 4 月 9 日（日）
陳列館

「解／拆邊界　亞際木刻版畫實踐」（脱境界：インターアジアの木版画実践）
2023 年 4 月 28 日（金）～ 5 月 8 日（月）
陳列館

Once Upon Now 1873-2023
2023 年 5 月 16 日（火）～ 6 月 11 日（日）
陳列館

日本画第二研究室「素描展」
2023 年 6 月 17 日（土）～ 6 月 29 日（木）
陳列館

工芸総合演習 2023「私の工芸 ―触れる工芸・観る工芸―」
2023 年 7 月 14 日（金）～ 7 月 19 日（水）
陳列館

あなたのアートを誰に見せますか？
2023 年 8 月 8 日（火）～ 8 月 27 日（日）
陳列館

日本画第一研究室　研究発表展
2023 年 9 月 1 日（金）～ 9 月 13 日（水）
陳列館、正木記念館

うるしのかたち展 2023
2023 年 9 月 16 日（土）～ 10 月 1 日（日）
陳列館 2 階

ブンポニチ／文保日・展　2023
2023 年 10 月 19 日（木）～ 10 月 26 日（木）
陳列館 2 階

青木淳退任記念展
2023 年 11 月 18 日（土）～ 12 月 3 日（日）
陳列館

第 8 回 東京都特別支援学校アートプロジェクト展
2024 年 1 月 6 日（土）～ 1 月 17 日（水）
陳列館

国際芸術創造研究科アートプロデュース領域演習展〈仮〉
2024 年 3 月下旬頃
陳列館

宮崎大学農学部附属農業博物館

令和 5 年度企画展示
「地域の自然と資源を守り、活かす ―農学部と SDGs 展―」
2023 年 4 月 3 日（月）～ 2024 年 3 月 29 日（金）
1 階 展示室

国立歴史民俗博物館

第 3 展示室特集展示「江戸の妖怪絵巻」
2023 年 8 月 1 日（火）～ 9 月 3 日（日）
第 3 展示室　特集展示室

第 4 展示室特集展示「四国遍路・文化遺産へのみちゆき」
2023 年 9 月 26 日（火）～ 2024 年 2 月 25 日（日）
第 4 展示室　特集展示室

企画展示「陰陽師とは何者か ―うらない、まじない、こよみをつくる―」
2023 年 10 月 3 日（火）～ 12 月 10 日（日）
企画展示室 A・B

第１展示室特集展示「北の大地が育んだ古代 ―オホーツク文化と擦文文化―」
2023 年 11 月 14 日（火）～ 2024 年 2 月 12 日（月・休）
第 1 展示室　特集展示室

第３展示室特集展示「新出の野村コレクション」
2024 年 1 月 5 日（金）～ 2 月 4 日（日）
第 3 展示室　特集展示室

企画展示「歴博色尽くし」
2024 年 3 月 12 日（火）～ 5 月 6 日（月・休）
企画展示室 A

愛媛大学ミュージアム

常設展「愛媛　俳句・文学の風景～松山とその周辺～」
2023 年 4 月 3 日（月）～ 9 月 30 日（土）
第 2 常設展示室

特別展 ―待望のリバイバル―「キャンパスに眠る弥生の大集落」
2023 年 5 月 22 日（月）～ 7 月 22 日（土）
企画展示室

「昆虫展２０２３」
2023 年 8 月 5 日（土）～ 8 月 10 日（木）
企画展示室 ほか

常設展「弘法大師生誕 1250 年　弘法大師の生涯と信仰のかたち」
2023 年 10 月 2 日（月）～ 2024 年 3 月 30 日（土）
第 2 常設展示室

愛媛大学・松山市文化・スポーツ振興財団連携事業特別企画展「弥生の微笑み」(仮)
2023 年 10 月 2 日（月）～ 12 月 2 日（土）
企画展示室、多目的ルーム

東京大学総合研究博物館

特別展示　東京大学・若林鉱物標本：日本の鉱山黄金時代の投影
2023 年 3 月 23 日（木）～ 9 月 1 日（金）
本館　特別展示室

特別展示　骨が語る「生と死」 日本列島一万年の記録より
2023 年 9 月～ 2024 年 2 月　予定
本館　特別展示室

特別展示　東アジアにおける都市の誕生：稲作農耕の緩やかな成立と古代都市の誕生〈仮〉
2024 年 3 月～ 9 月　予定
本館　特別展示室

インターメディアテク開館十周年記念特別展示『極楽鳥』
2023 年 1 月 20 日（金）～ 5 月 7 日（日）
インターメディアテク 3 階

特別展示『被覆のアナロジー ―組む衣服／編む建築』
2022 年 11 月 5 日（土）～　2023 年 4 月 2 日（日）
インターメディアテク　GREY CUBE

特集『学びの窓 ―アカデミアの東京大学医学部ゆかりのコレクション』
2023 年 3 月 21 日（火・祝）～　4 月 23 日（日）
インターメディアテク　ACADEMIA

特別公開『カトレヤ変奏 ―蘭花百姿コロンビアヴァージョン』
2023 年 2 月 7 日（火）～ 6 月 4 日（日）
インターメディアテク　FIRST SIGHT（GUIMET ROOM）

特別公開『東大植物学と植物画 ―牧野富太郎と山田壽雄 vol.4』
2023 年 4 月 25 日（火）～ 9 月 3 日（日）
インターメディアテク　FIRST SIGHT（GUIMET ROOM）

特別展示『東京エフェメラ』
2023 年 4 月 29 日（土・祝）～ 9 月 3 日（日）
インターメディアテク　GREY CUBE

※コロナ禍等により変更の可能性があります。

MUSEO ACADEMIAE 第 25 号
大学博物館等協議会ニューズレター

発行日　2023 年 6 月 22 日
発行者　大学博物館等協議会
編　集　東京大学総合研究博物館　03-5841-2802
〒 113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1